余の觀た臨濟禪

理三甲二　福澤久

禪は、釋尊が靈山會定で說法の折、華を拈れたのみで、一言の說法もさなれかつたのであるが、迦葉が獨り微笑したのを見られて、「吾れに正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙の法門あり、不立文字、敎外別傳、摩訶迦葉に付囑す」と仰せられて、佛陀の大法を迦葉に傳へられた事にその源を發してゐるのである。斯くして二十八祖達磨が海路支那に渡り、梁の武帝に見え、「廓然無聖」、「不識」の一喝を發して、帝の契はざるを見て楊子江を渡つて、魏の嵩山少林寺に入つて面壁九年し、第二祖慧可は達磨を慕つて法を求めたが許されないので、積雪の中に佇むこと三晝夜、斷臂に依つてその決心を表示して始めて許され、慧可、僧璨と嫡々として相傳へて行つたのである。六祖慧能は神秀の迫害を避けるため獵師隊に身をくらまして、大法護持の爲に十五年を塵を被つて世を忍ばねばならぬ程、迫害續きであつたが、慧能が曹溪の寶林寺に正傳の禪風を宣揚して以來、禪風江南の地に隆盛を極め、馬祖、百丈、黃檗、臨濟、德山等に依つて活機縱橫なものとなり、その活作略は、域は棒喝、或は言句の妙となつたが、宋代に至つて漸く新鮮味を失ひ、沈滯狀態に入らんとした時、文學的表現に依つて一新生面を打開したのである。斯くして臨濟の兒孫は、第一流に推さるべき人傑踵を接して出て、南宋より元明に至る支那禪宗の大勢は、臨濟の兒孫の支配に歸したのである。然し看話禪の基礎が充分に出來てからは傳統的、惰力的、因襲的に禪体驗が主張せられ、禪意識には、何等の新生面が拓けなくなつて、看話禪が硬化して來たのである。日本に於ては、鎌倉時代榮西が黃龍派の流を汲んだが、未だ全く禪宗の獨立には

至らず、元の壓迫に依つて南宋より逃れた禪匠達が、禪を傳へたが、京都に波及しては後醍醐、花園天皇の信奉を得て、禪は益々隆盛を極めたのである。即ち大應國師が楊岐派の虛堂智愚に師事し印可を受けて以來その門が榮え、大應、大燈、關山と三代、古今稀出の禪匠が出たのである。足利時代から德川の中間迄、看話禪は硬化の途をたどつたとも思はれる節もあるが、白隱禪師が出て公案禪の分裂を防ぎ、起死回生の實を與へ臨濟禪を今日あらしめたのである。上述の如く禪は、言語文字の方面でも、超論理的思辨の方面でも行爲的方面でも、偉大なる禪機を有する禪天才に依つて展開し昂揚せられて來たと見做される。

禪は佛祖不傳之妙道である。善知識か法器を見出し、道法の授受が恰も一器の水を一器に移す如く以心傳心して來たのである。禪宗迫害時代には、禪僧は深山幽谷に庵を結び、壓迫を忍び、ひそかに道を修めてゐたが、僧堂生活なるものは、百丈に依つて創られた。雲水達は高德を慕つて行脚し荒凉たる山野を跋渉して、道のために形骸を風雨にさらして惜まず、行く雲を友とし流水に身を任せて、只管、無上菩薩を求めて名僧善知識の門にたどりつき、玆で凡ゆる辛辣な試錬を受け、一大事因緣の爲に喪身失命をも顧みざる心根を容れられ掛錫が許されるのである。禪に於ては無師自悟は天然の外道とされてゐる。掛錫した雲水連は自給自足のため及、實生活に何等の反映を持たぬ抽象概念を避けるために作務をやるのであるが、この際とても公案三昧で「行もまた禪、生もまた禪、語默動靜體安然」の境地はこれを云ふ。大接心ともなれば老師の室に入つて與へられた公案に對する意見を述べて、その批判的檢討を仰ぐのである。隱寮で鈴が鳴ると鐘を二つ打つて入室し。生命の端的に迸出した法戰が戰はれ、妄想を述べると背中に竹篦の一擊をくらひ、痛罵、冷笑等に依つて一場の法戰に首をきられるのである。この參禪は老師にとつても弟子にとつても眞摯で、接心の目的は斷命根のためであり、從つて徒らに公案を捌かうといふやうな卑劣な精神を起さないで、眞に公案そのものになり切つてやつて行かねばならないが、公案そのものになり切るとは佛祖の面目になり切る事であり、この面目とは實に古もなし今もなき刹那自体になり切る事であり、古もなく、今もなく、又生もなし滅もない、生が來れば生、死が

來れば死そのものになりきる事である。この入室公案といふものは、必然的に禪發展の上に止むを得ない制度で、萬人臨濟、德山、白隱の如き禪天才でない限り、公案なるものに依つて、學人をして悟の經驗を得しめんとするの老婆心であり、古人が無茶苦茶に苦心した轍を踏ませぬため產み出した一種の組織である。徹底した悟は、禪の窮極の目的に對して不撓不屈の信仰を有すると共に、犧牲的精神の最高潮に乘ずる事に依つてのみ、達成し得られるのみで、踏破した公案の數には全然無關係で、必然的に要求する所は信仰と個人努力であり、之なくしては禪は唯の泡に過ぎぬ。唯だ人をして萬物生々の現實性を普く觀察し得て、此に徹底的な洞察力が手にせられるなら、公案はそれ自身で始末のつく事である。公案に對して捨身にぶつかり、嶮崖に手を撒すると、從來意識されなかつた心中の領域を開かれ、物の眞相を洞察せしむる所の目的意識の覺醒に導き、公案の障害が打破されると、人は普通相對的構造の意識に立ち歸るのであつて、所得は無所得といふ事になるのである。

禪とは洞察に依つて心の本性に達し、自ら心の主となるを目的とするもので、一物に心を集中したり、睡に引入れたりするやうなものでは斷じてないと思はれる。悟は今迄夢想だにもされなかつた眞理に對する新しい意識への突然の閃めきであつて、知的又は表現的事項を多く積み重ねた後に、一時に起る一種の心的激動又は爆發であり、この悟なくしては禪はあり得ないのであり、心が訓練されて、意識の痕迹もない、無意識であることの感じすらない。完全な空虛の狀態の体驗では絕對にあり得ないと思はれるのである。

印度に於ては、哲學が宗敎で、宗敎が哲學であつたが、禪に於ては無哲學の哲學で、傳統的には般若哲學、華嚴哲學を取り入れて來たし、洞山の五位頌、臨濟の四料棟等あるが、これ等は一種の學人接得の手段であると思はれるし、哲學論理を以てしてゐる間は禪は遠く吾々をはなれてゐるのである。

禪とは一物も與へずして徹底的に奪つて行き、一切の繫縛から解放し、能く萬境の主となし得るものであり、隨所に主となり得た者は遲疑なく、逡巡なく小兒の樣に流轉の波に戲れ、只刹那々々に展開する境と共に、過去を去り未來を

忘れて、純一無雜の活動を展開し、自他なく、遊戯三昧に耽り、呵々大笑が湧き出るのである。臨濟が自然人になる迄には、血涙の滴る如き黄檗の鉗鎚、あの三頓の痛棒を喫したのであり、白隱も正受老人の手厳しい工夫と、苛酷な鉗鎚を受けたのである。禪は鍛錬道である。理窟無しに、練りに練つて、一擧手一投足、喫茶、喫飯、行住坐臥皆佛法が行的現實的顯現となり、佛祖の生命の端的なる表現となり切る迄鍛錬すると、此處に自由人が打出されるのである。

以上、生意氣な言説を述べたが、始めて臨濟の門を一寸覗いた者の見解なる故、誤謬に滿ちておる事明白であるが、世に禪者多き中、今の禪はこれであり、將來もかゝる方向に進むべきだと、啓發せられたものを整理したに過ぎぬのである。

衆生無邊誓願度
煩惱無盡誓願斷
法門無量誓願學
佛道無上誓願成